

新収の歌書二点 ―『続古今集』『雲葉集』『歌合集』―

兼 築 信 行

近年、本学中央図書館特別資料室に収蔵された貴重本の中から、標記の歌書三点について紹介しておきたい。

一 『続古今和歌集』

第一一勅撰和歌集である『続古今和歌集』に関し本学図書館は、同集物故歌人目録たる『続古今和歌集目録』一卷（特別・二五・一〇九一。孤本）、ならびに文永三年三月一三日に催された同集竟宴における和歌懷紙を記録する『続古今和歌集竟宴和歌』一卷（特別・へ四・七三二七）を所蔵しおり、これらは早稲田大学蔵資料影印叢書七『中世歌書集』（一九八七年六月 早稲田大学出版部）に収録された（解題Ⅱ稿者）。しかしながら撰集の本体につ

いては、大学院文学研究科の所蔵する江戸中期写二十一代集揃本中に含まれるのみで、図書館の資料構成の上からは遺憾な状態にあつた。それを補完すべく、今般『続古今集』の古写本が購入された次第である。一九九九年度収蔵資料。志満家から購入。現在整理中のため請求番号は未定。

縦二三・二糎、横一七・〇糎の列帖装本一帖。表紙は紺地に蓮華唐草文の金欄緞子だが、改装されたもの。同中央に藤色の古題簽（縦一一・七糎、横三・二糎）に「続古今和歌集」とあるが、右上方が破損している。見返し一面には、布目地に牡丹唐草押文の金紙を貼る。料紙は良質な鳥の子紙で、全二六六丁、うち遊紙は首一丁、尾

三丁、墨付二六二丁。一面一〇行、和歌一首一行書き、詞書三字下げ。本文同筆の墨書き入れあり。室町後期写。虫損を蒙る。墨付第二丁表（二面白紙）の中央下方に、「我楽多／文庫／蔵書」の変形朱陽印が捺されている。破損した漆塗箱に収めるが、間に合わせのようである。

新収本を、竟宴本一九一五首の内容を伝える尊経閣文庫蔵伝為氏筆本（『新編国歌大観』底本）と比較すると、次のような異同がある（歌番号は新編国歌大観番号）。

① 為氏本にあつて、新収本にない部分は次の通り。

真名序、仮名序、五〇三作者・歌、六五四歌～六五五詞書・作者、七三五詞書・歌、一〇九〇歌、一一五〇歌、一二七六作者・歌、一二八九詞書・歌、一三四六作者・歌、一五八〇歌～一五八一作者、一七〇六詞書・作者、一七〇七作者・歌、一七六八詞書・歌、一八二四詞書・歌、一八八五作者～一八八六詞書、一九〇〇詞書・歌。

② 新収本が小字で補記している部分は次の通り。一

五作者、五二作者～五三歌、一八七作者・歌（一八

六の詞書・作者と歌の間に補入する）、四三九作者・歌、四六二歌～四六三作者、五二〇歌～五二一作者、五二五歌～五二六作者（五二五詞書は脱）、五八〇歌、六五四歌～六五六作者、六七三詞書、六七六歌～六七七作者、七二〇詞書・歌、一三二九歌、一三六九歌～一三七〇作者。

③ 為氏本との歌順の相違は次の通り。四四九・四四八の順。六二一・六二〇の順。七二二が七一八の次に位置する。羈旅・八七四が離別・八四一の次に位置する。

④ 一三五九の詞書・作者の後、一三五三の歌に戻る。すなわち一三五三歌～一三五九作者の部分が重複して書写される（二度目の部分では一三五五詞書が脱）。

⑤ 一八六六詞書（第二五四丁裏終〓以下本稿において丁数は、遊紙を含めた全丁数の通し番号で表示する）の後は一八七三歌～一八七九歌（第二五四丁表裏）が続く、その次に一八六七作者～一八七三作者（第二五六丁表裏）がくる。その後は一八八四歌～一八九二歌ま

でが続き（第二五七丁表裏、ただし一八八五作者）一八八六詞書は脱、その次に一八八〇詞書一八八四作者（第二五八丁表裏）がくる。親本の錯簡が反映しているのであらう。

⑥ 除棄歌と考えられる異本歌（十三代集版本）のうち、一九一六―一九二五を有するが、一九二六は無
い。

⑦ 秋下・五三九の次に「宝治貳年百首哥に九月尽／前大納言基良／いく秋か暮ぬとはかりをしむらん霜ふりはつる身をは忘て」を記す。

真名・仮名の両序を欠く点是新収本の大きな欠陥である。①②④⑤から本文的に見ても善本とはいいたい側面が浮かび上がる。⑥により明らかに未精撰本の系統であることが分かるが、⑦については注意される。基良歌は詞書の示す通り『宝治百首』の九月尽題詠（一九六五、『続後撰集』秋下・四五〇、『万代集』秋下・一二五七）に入集している。すなわち当該歌はいったん『続古今集』に採られたものの、『続後撰集』との重複に気づか

れ除棄されたものと考えられるのである。

新収本は、室町期における本書の書写・享受に関する興味深い奥書を有している。この点に大きな資料価値を認めることができる。

本云

貞治四年二月三日書写修了

弘長二年（壬／戌）十一月奉 勅

文永二年（乙／丑）十二月廿六日 奏覧之撰・五人

（一行分空白）

正東山部類内也

本云

応永卅一年三月三日書写修畢

正三位行権中納言藤原朝臣宣輔

嘉吉貳年十二月三日 於燈下書写了」

（第二二六丁表）

從五位上藤原親長

（一行空白）

文安六年三月十一日書写了件本左道之／間書

改者也此本 頭右大弁資綱朝臣^{藤原}

所望之間遣之

從四位上行權中弁藤原

親長

件本飛鳥井

本云

中納言

享徳元年九月借請師大納言〔実雅〕本 入道浄空

〔俗号／雅永／自筆〕

〔第二六三丁裏〕

令校合畢但猶有不審事

参議右大弁藤原／朝臣

件本奥書云

嘉吉二年 仲夏中旬之候

終数日之書功 右金吾藤 判

〔三行分空白〕

明応九年七月十一日〔第二六三丁表〕

応永三一年（一四二四）三月三日の書写は中御門宣輔

の手になり、それを甘露寺親長が嘉吉二年（一四四二）

一二月三日に書写した。文安六年（一四四九）三月一

日に親長はこれを書き改め、その本を所望により柳原資綱に贈った。享徳元年九月奥書の「参議右大弁藤原朝臣」も甘露寺親長である。この時は三条実雅から浄空（飛鳥井雅永）筆本を借りて校合したというのである。

「件本奥書」とは浄空筆本の奥書であろう。嘉吉二年五月の右金吾右衛門督とは、雅永にほかならない。以上の奥書は甘露寺親長が本集の書写に関わってきた事跡を示している。明応九年（一五〇〇）七月一日奥書も親長の可能性がある。親長は同年八月一七日に七七歳で没するからである。

二 『雲葉和歌集』

一九九八年度収蔵資料。東京古典会にて落札。請求番号、特別へ四・八〇八三・一―二。縦二七・五糎、横一九・八糎の袋綴本二冊。梔子色の表紙、同左上に「雲葉和歌集 上（下）」と直書きする。見返し楮紙。料紙は楮紙。上冊は墨付九四丁、下冊は墨付九六丁、いずれも遊紙はない。一面一〇行、和歌一首上下句分かち二行書

き、詞書一字下げ。江戸中期写。上冊は「雲葉和詞集上」の扉題を置き、巻第一春哥上から巻第五秋哥上までを収める。下冊は「雲葉和詞集下」の扉題に、巻第六秋哥中月部から巻第十羈旅哥までを収録、九六丁表には次の補遺歌を載せる。

雲葉和哥集次第不同

つこの国のむこのな、なるありま山ありとも見えす雲
そたなひく

基氏

わすれめや御狩^{マツ}かりくらしかへるみなせの山の端の
月

家長

上冊第二丁表の巻一端作上方、下冊第二丁表の巻六端作上方に、それぞれ「早稲田／大学／図書」の単郭方型朱陽印記あり。

九条基家撰「雲葉和歌集」は元来二〇巻の規模をもつ私撰集であつたが、完本は伝わらない。早大本と同様に巻十までを内容とする伝本には高松宮本・書陵部本（一五五・一三七）・内閣文庫紅葉山文庫本・同和学講談所本・都立中央図書館本・ノートルダム清心女子大本・群

書類従本があり、彰考館本は巻十までに巻十五を付す。

このほか残欠本に冷泉家時雨亭文庫本・書陵部本（一五四・五三〇）・大阪青山短大本（加藤正治旧蔵）、古筆切に伝寛源筆・伝良経筆の二種が知られる。本集の諸本に關しては、大伏春美「雲葉和歌集」について——歌人構成と撰集資料を中心として——（『和歌文学研究』四六一九八三年二月）、冷泉家時雨亭叢書第三四卷（一九九六年六月 朝日新聞社）「雲葉和歌集」解題（赤瀬信吾）参照。

早大本は江戸期の流布本系統に属するが、伝本の少ない本集の写本として貴重である。

三 『歌合集』

一九九六年度収蔵資料。東京古典会にて落札。請求番号、特別・八四・八〇七三・一一二。

縦二六・七糎、横一九・九糎の袋綴本二冊。全体に虫損を蒙るも、収蔵後修補が施された。縹色表紙、同左上に黄土色の題簽（縦一七・六糎、横三・八糎。虫損甚しい）。前表紙の見返しは本文共紙。裏表紙の見返しは修補の際

に新しい紙を貼ったもの。料紙は楮紙。一面二行、和歌一首一行書き。江戸前期写。

第二冊は、題簽「調合（建保二年／同□□八月廿二日／（以下虫損のため判読不能）」、表紙中央に「建保二年八月十六日 内裏歌合／同四年八月廿二日 歌合 当座／同年同月廿四日 歌合 当座」、同右下に「二部之中／甲」と墨書する。見返しの中央やや左寄りに「山岸」の単郭丸型朱陽小印。全五六丁、うち遊紙は首一丁のみ、墨付五五丁。墨付第二丁表（二面白紙）の右下に「小川寿／一蔵書」の単郭縦長方型の朱陽印。収録内容は以下の通り。

内裏歌合 建保二年八月十六日 第二丁裏／第二

八丁表

歌合 建保四年八月廿二日当座 第二九丁裏／第

四二丁裏

歌合 建保四年八月廿四日当座 第四二丁裏／第

五四丁表

そして第五五丁裏には「内裏歌合／建保四年八月当座四

十二番（八月廿四日）二冊在圖書寮」と本文別筆の奥書、さらに第五六丁表には「歌合 部中／九條公爵家旧蔵本也／昭和四年大呂晦／岸廼舎」の奥書あり。

第二冊は、題簽「調合（建永元年 建仁二年／建暦三年九月／同年閏九月）」、表紙の中央やや右寄りに「卿相侍臣歌合 建永元年／歌合 建暦三年／歌合 同年九月十三夜／影供歌合 建仁元年八月／羅利留礼呂之歌」、同右下に「二部之中／甲」と墨書する。全四四丁。第一丁表の左に「卿相侍臣哥合 建永」と書き扉題とするが、その裏には中央に「山岸」印。白紙一丁を挟んで、以下墨付四一丁、尾に遊紙一丁。第三丁の裏には、収録書目が次のように記される。

建永元年七月廿五日卿相侍臣歌合 卅番

建暦三年閏九月十九日仙洞歌合 十八番

建保五年九月前関白家哥合 卅番

建暦三年九月十三夜哥合 十五番 無判詞

建仁元年八月三日影供哥合 百八番 同

このうち「建保五年九月前関白家哥合」には、抹消の線

が引かれている。実際の収録内容は以下の通りである。
なお、第四丁表の右下に「小川寿／一藏書」印を捺す。

卿相待臣哥合 建永元年七月廿五日 第四丁表／第

一三丁表

歌合 建暦三年閏九月十九日 仙洞 第一四丁裏／

第二〇丁裏

哥合 建暦三年九月十三夜 第二二丁表／

第二三丁裏

影供哥合 建仁元年八月三日 第二四丁表／

第四三丁表

定家卿查冠哥五首 第四三丁裏

「定家卿查冠哥」とは次のごとき五首である。

良 らちのうちにくらふる駒のかちまけはのれるを

のこのむちのうちから

利 りんたうの花をたむくるき法師の経よむこゑは

たうとかりけり

留 るりの色にさける朝かは露おちてはかなき程そ

おもひしらるゝ

礼 れいの又そらたのめする人ゆへに心つくしてま
たれこそすれ

呂 ろかいたて湊もしらぬ夕やみに船こき出す夜は
の月しろ

「良利留礼呂」の難読音を查冠に読み込んだ作だが、『悦目抄』（歌学大系・第四卷一六七頁。ただし小異あり）ほかに見える。そして第四四丁裏には「本書所収書類皆在圖書寮」と本文別筆の奥書がある。

本書には、所謂新古今時代および建保期にいたる代表的な歌合テキストが集成されている。書目としてはすべて『群書類従』に収録されるようなポピュラーな内容であり、特に稀覯なテキストは見当たらないものの、江戸前期書写の歌合伝本として貴重であり、また第一冊の奥書を信ずるならば九条家旧蔵本ということになって注意される。蔵書印からは小川寿一・山岸徳平の旧蔵本であったことがわかる。本文別筆の昭和四年奥書等は山岸徳平の筆跡と考えられる。

（かねちく のぶき 文学部助教授／中央図書館副館長）